

ほなひ歴史通信

第32号

2004.10.1

命運を分けた洪水

明治二十三年の大洪水は、享保、天明の大洪水以来、二百七、八十年来の洪水で、当時の人々が未だ嘗て経験したことのないものであった。当時の人々が後世に戒めとして書き残したものである。記念碑としては、池田、北田気、袋田の三箇所にも残されている。

このほか、書き残された古文書もある。その一つが士族志楽千正が書き残した「明治二十三年大洪水後世之心得記」である。「明治二十三年旧六月二十一日 出水は前代未聞に付き後世の心得として一筆書き残し置くなり。・・・」で始まり、「この降り出しは旧六月三日より毎日の小雨にて、・・・十五日午後二時より降り出し、二十一日午前十時頃より大雨に相成り、夜十二時より午前二時正に大水となる。久慈川は二丈壺式尺の高水と相成り、川付の田畑残らず石河原と相成ることに候。・・・」
続いて、矢田の天神平にあった、旧水戸藩の御稗蔵が老万参千依とともに流れてしまった事、及び、この地所の内

に住んでいた人のうち四名は溺死し、二名は助かった経緯などを細かく書き残している。

ここに住んでいたのは、矢田村の益子彦兵衛という老人で、もとは矢田村

の戸長を努めていた人である。御稗蔵の近くに隠居家を造って妻と共に暮らしていた。江戸時代に御稗蔵の鍵を預かる大事な役目を持っていた。この洪水の時、彦兵衛夫妻の他に、客人など四人が同居しており、合わせて六人が逃げ遅れて蔵もろとも流されてしまった。洪水が襲ったのが真夜中だったこともあり、また、御稗蔵の回りには杉の大木が多く（一説には数百本）あったので、流されることはないと思っていたようである。その上蔵番としての責任感もあり、最後まで蔵を守ろうとしたのである。とにかく危険と気づいた時には手遅れだった。

六人の内助だった二人は母と娘で、溺死したのは彦兵衛夫妻と客の男性二人だった。御稗蔵の少し下手に桜塚という小高い塚があり、殆ど水没していたが、運良くそこに辿りついた母娘二人は、塚の小枝に掴まって助かった。

彦兵衛達も塚を目指したが、流れが速く力及ばなかったという。女性二人が助かったのは桜塚方面に向いた流れに乗ったからであろう。その外の人たちは本流に近い流れに乗ってしまったので、強い流れに逆らえず、押し流されてしまったものと思う。わずかの違いが大きく命運を分けたのである。天の為すところ人力の及ぶところではないといふべきか。（資料提供 益子明勝氏）（石井喜志夫）

明治二十三年大洪水後世之心得記

士族
志楽千正

木天蓼の沢

菊池珠枝

尋ねれば人は昔の名のみにて

雲井の月ぞすみ渡りける

斉昭

袋田の滝の上方に月居山がある。この山の北の嶺に水戸藩主徳川斉昭の歌碑が建っている。斉昭は天保五（一八三四）年、藩内巡視の折、その二百年前に佐竹氏の秋田移封により、廃城となったこの地を訪ね、佐竹公を偲んで詠んだものである。

この歌を読んで涙を流さぬものは有意の人にあらずといわれ随涙碑ともいわれている。佐竹氏は慶長五年の関ヶ原の役に際し、家康の招きに応ずることがおくれたことから怒りにふれ、秋田二十万石に転封となった。秋田が名物として誇るハタハタという魚は、このときまで水戸の海にいたのが主君を慕って故郷を捨て、秋田の海に移ったと伝えられている。

佐竹氏が秋田へ移封された後、徳川水戸藩の成立期に小生瀬村で農民騒動が起きた。生瀬乱といわれている。生瀬乱の発生年代はいろいろな説があり、慶長七（一六〇二）年、同十四年、元和三（一六一七）年、同七年などの説があるが、慶長十四年が妥当と考えられている。この騒動の発生した年が何時であるかはつきり断定できていないのは、藩の記録にも「一言半句」の記載がなく、全てが口から口に伝承されたもので水戸藩成立から二百年も経て、やつと貴重な記録が残されたという背景があるからなのである。

さて、生瀬乱であるが、小生瀬村の農民が刈り入れを終えた十月に水戸から年貢とりの役人が二人来たので、年貢米を渡した。二、三日のち、また同じような役人が二人やって来て、またしても年貢米を出せという。村ではつきりにせ役人が来て年貢の二重取りをすると思ひこみ、歟、鎌をふって追いまわし、

一人を殺してしまった。それを知った水戸藩は、五百年続いた領主佐竹から徳川に引き継がれたばかりで、治世の初めに甘い顔を見せてはためにならぬと思つたのであろう。直ちに兵を率いて小生瀬村を襲った。

その日は十月十日の稲の借り上げ祝いで、村中が仕事を休み隣り近所が寄り合い、餅を搗いている最中に、突然水戸藩の軍勢が襲ってきた。「白刃一閃」、切られた首が白の中にとび、一面が血の海になったという。その場を逃げ延びた村人の中には、追われ追われて、隣の高柴村岡の内地に逃げ込み、助けを求めたものもいたが、沢の奥へ追いつめられて、老若男女五百人の農民が皆殺しにされたという。

それから四百年を経た今、わたしはその騒動の名が残っている生瀬地区を歩いてみた。岡の内集落は辻神様の白い幣が祀つてある細い道を入つた所にあつた。

沢を前に家が五、六軒あり、庭先を抜け少し行くと、小さな青田が何枚もあり、その向こうに青みがかつた崖が地層をくつきりと見せ、細い沢があつた。身幅ほどの道を田に沿って行くと、白々と葉を茂らせた木天蓼が長く垂れて沢を覆つていた。

案内のYさんが「このあたりが嘆願沢」と教えてくださる。

小生瀬の農民たちが手を合わせて必死に命乞いをしたところである。さらに行くくと壘位の平らかな石が二個、田の中にあり、「刃拭き沢」である。その奥に地獄沢があつた。そこは沢が見えぬほど藪が茂り、道もつきていた。山か沢か区別がつかぬほど奥が深い沢である。この沢深く逃げ込んだ農民が行きつまり、全員が斬られたところである。沢の奥に目を移すと雲が重く垂れ、騒動当時の枯れ山に響く、悲惨な叫びが想像された。森の奥ではみんな蝉がしきりに鳴いている。わたしには、あたかも現世に何かを訴えているかに聞こえた。

奥久慈の木地師

木地屋夜話

(六代目勝氏談)

大蔵家二代仙次郎が中郷村の菊池家を「親元」として大久保沢に入山したのが、天保八年頃と聞いているから、私共はこの上野宮に一七〇年も住んでいるわけです。八溝二代目千代蔵は若いうちから、親元を離れて碓石地域に入り、曲がり沢、池ノ平などで仕事をしたのですが、この地域のは優良材が多かったので、家業も繁盛したようです。出来上がった物は会津に運び、そちらで仕上げを行った時期もあったという事です。

原木を伐採する時は、鋸を使わず斧で切り倒したものです。一本ごとに御神酒を捧げて、山の神さんに挨拶をしてから切ったものでした。木取りは生のうちに行い、荒挽きをしてから約一年乾燥させて本挽きし、出来上がったらトクサで仕上げました。漆塗りもしたが、漆は自分で立木から掻き取って練り上げたのですが、混じり気の無いものをキジロと呼び、それを二〇回も塗って最後はホホノキを焼いた炭で磨き上げたのです。

道具も自作です。刃物が作れる様になれば一人前です。道具は沢山あったので、景気のよい時は本物の鍛冶屋を雇いました。原木としては樺が最高ですが、他の木とは質が異なるので研究して挽いたものです。その他はトチ、ミネバリ、クリ、カツラ等ですが、「汁汲み」の材料にはハナノキ、ミズキ等も使いました。

山の中で暮らすのには、それなりの対応が必要でした。生活の知恵ですかね。屋敷を構える条件として。(1)日照時間が永いこと、木地業は冬の仕事が大切なのです。(2)良

質でしかも一年中変化のない湧水量が有ること。(3)優良原木の集材に便利なこと。こうしたことに合致する箇所を選んだものです。食生活、医療の面にも一工夫が必要でした。里に出ることは大変なので自給を図る必要から食用可能な植物の研究、薬用植物の知識も身につけていました。その甲斐あってか代々八〇歳前後まで生きて、当時としては長生きの部だったようです。

地域の人たちとの交流はほどほどでしたが、私たちの出自は惟高親王で、家紋には「十六枚菊紋章」を使用していることに誇りを以て生きてきました。私の家には菊紋章を刻した墓碑もありますが、現在は腕の紋章はヤスリで、墓碑の紋章は石ノミでそれぞれ潰してあります。

木地家文書として伝わるものは、御繪旨ごえいし二巻、惟高親王像、同縁起書、宗旨印証、日本國中轆轤之事、宗門手形、杣山口祭祝詞、木椀元祖大皇大神略伝記、菊池紋章入木札等があります。

仙次郎大久保沢入山以來約四十年間の山中生活にピリオドを打って下山し、この朔平を定住の地としたのでしたが、この明治中期が経済的にも最高だったようです。その後多少の波風はありましたが、なんと言っても痛手だったのは戦後のプラスチック製品の普及でした。これは正に天敵の襲来でした。日用品では對抗できず、と言って高級品を造ってみても本場ものには對抗不能のため、やむなく仕事量を減らし農業に依存しました。幸いにその頃は畑作として「コンニャク」、林産物では「スギ、ヒノキ」に高値が出ていたので切り替えが出来たのでした。

現在は木地関連の仕事も多少は行っていますが、地域の人たち同様一農家として暮らしております。(鈴木三郎)

「ふるさと歴史講座」開催中

大子町教育委員会主催による「平成十六年度ふるさと歴史講座」は、六月より開催されていますが、この講座は郷土大子の歴史を学び、大子町を再発見して見ませんかと企画されたもので、「ほない歴史通信」編集人の小澤園彦・石井喜志夫・斎藤典生・野内正美・吉成英文の各先生と二方和文化財保護審議委員が講師となつて進めております。

九月末までに開催した講座は、①月居峠の史跡と遺跡、②大子の硯、③お茶の歴史、④ランプから電灯へ(変化する大子の暮らし)、⑤水戸藩の成立と生瀬の乱、⑥水郡線の開通と余話、⑦明治二十三年の水害と久慈川、⑧大子町の文化財です。各講座ごとに詳しい資料が配布され、受講生四十六名は熱心に楽しく受講しています。

十月以降の講座は、⑨大子町の文化財巡り、⑩大子地方の金山の盛衰、⑪大子の芸術家たち、⑫佐竹氏と保内郷、⑬満蒙開拓と大子町分村、⑭桜田門外の変と関鉄之介、⑮江戸時代の商品作物、⑯昔の学校と子どもたちの遊び、⑰大子町の文化財巡り、⑱大子のまちづくり今昔、と盛りだくさんの講座が予定されています。

特に十月二日に予定されている「大子町の文化財巡り」では、近津神社の鉾すぎ(下野宮)、大雲寺の観音堂(中郷)、慈雲寺(町付)、高德寺(上郷)、そして旅澤家書院(上野宮)を巡る計画ですが、最後に訪れる旅澤家の書院から雄大な庭園を眺め、水戸光圀や徳川斉昭が巡村の折訪れたことを考えることも一興ではないかと楽しみにしています。

また、多くの講座の中で水戸光圀の話が出てきます。その一例としては「明治二十三年の水害と久慈川」の講座では、水戸光圀の指導により現在の下矢田に建築された御稗倉が大水の際に流失しましたが、

この御稗倉は通常の年に稗(ひえ)を備蓄し飢餓の時に領民を救済する目的で建築した倉庫で、このため水戸領内では、天保や天明の大飢饉の時にも、他領のように農民が餓死したり、逃散したりすることがなく、かえって他領からの難民が水戸領を頼って流入したといわれています。

その外にも水戸光圀は、当地方の特産物である茶等の奨励振興を図るなど、庶民への思いやりや弱きものに対する同情心、そして権力を背景とした横暴に対する正義感等、三名君の中でも第一級の人物であったと申せましょう。

なお、今回の講座は平成十七年三月まで開催されますが、都合で参加できなかった方からの問い合わせも多くあり、希望者には資料だけでも配布しますので大子町立中央公民館(02957-2) 1148()まで御連絡願います。(鈴木)

編集人

斎藤 典生(茨城大学人文学部)

野内 正美(茨城県立大子清流高校)

石井喜志夫(元 教員)

小澤 園彦(元 教員)

吉成 英文(大子町立給食センター)

鈴木 徹(大子町社会教育課)

編集発行

遊史の会

大子町立中央公民館歴史資料室(貸付)

久慈郡大子町大字池田 二六九番地

T319・3551 ☎02957(2) 2627